

所在地：東京都豊島区池袋本町4-36-1 URL：https://www.children-art.net/

障害児による創造的体験の場づくりと 施設間交流によるネットワーク形成



実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 1,476,000円
 (備品等購入費、賃金、報償費、旅費、消耗品費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 障害福祉サービスの利用児童数や特別支援学級、特別支援学校の在籍数は年々増加している。それぞれの施設や学校で障害の程度や種類は異なるが、多くの場合体験の機会が少なくなりがちで、他施設や他校との交流の機会もほとんどない。また、一人の子どもが複数の施設や学校をまたいで生活するケースが珍しくないが、種別の異なる施設や学校の交流はほとんどなく、一人の子どもに対して分断された支援がされている状況もある。
- このような問題意識から、障害児の心理的支援のためのワークショップ、障害児同士の交流のための施設間・学校間交流、新しいネットワーク形成のための異種施設・学校間交流を実施する。

【事業内容】

- 2つの障害児入所施設でのワークショップ&交流発表会（ダンス）
 実施日数：各施設5～10日程度
 対象：小中高校生 各施設15名程度
- 2つの放課後等デイサービスでのワークショップ&交流発表会（美術、ダンス）

実施日数：各施設10日程度

対象：小中高校生 各施設15名程度

- 特別支援学級、特別支援学校でのワークショップと交流（ダンス、音楽など）

実施校：7校程度

実施日数：各校3～7日程度

対象：小中学生 各校15～30名程度

交流：2、3校ごとに1～2回（対面またはオンライン）

- 交流会議によるネットワーク形成

プロジェクトに参加した施設、学校の担当職員および教員で交流会議を実施する。各々の取組内容や今後の課題を共有し、施設や学校の違いを超え意見交換を行う。議論の内容はコラム記事にまとめ、ウェブサイトに掲載し、広く効果と課題を共有する。

- 発信事業（冊子発行）

ワークショップの活動記録を冊子にまとめて発行し、関係者へ周知するとともに、事業継続に必要な支援につなげるためのツールとする。

成果目標・事業計画

【成果目標】

○指標と目標値

- ワークショップ実施回数：68回（交流会含む）
- 実施施設数：11施設・校
- 参加者数：延べ1,020人（15×68回）
- 施設職員、教員対象のアンケート満足度：80%
- 交流会議出席数：6施設・校
- 冊子発行：1冊（ウェブサイトでの公開1回）

【事業計画】

○令和5年10～12月

- 障害児入所施設、放課後等デイサービスでの実施決定、ヒアリング、アーティスト決定、打合せ

○令和6年1月～令和7年2月

- 障害児入所施設、放課後等デイサービスでのワークショップ、交流会開催

○令和6年4～8月

- 特別支援学級、特別支援学校での実施校募集、決定、アーティスト決定、打合せ

○令和6年9月～令和7年2月

- 特別支援学級、特別支援学校でのワークショップ、交流会開催

○令和7年3月

- 交流会議（オンライン）
- 冊子発行

実施状況・成果

【実施状況】

○障害児入所施設でのワークショップ

- 宮代学園にて施設職員と打合せ（11/16）
- 施設職員、アーティストと打合せ（2/1）
- ワークショップの実施（3/25 参加者3名、3/27 参加者5名）

○放課後等デイサービスでのワークショップ

- 広尾てくてく
 - ・施設職員と打合せ（11/16、12/13）
 - ・施設職員、アーティストと打合せ（1/25）
 - ・ワークショップの実施（2/27 参加者8名、3/21 参加者8名）
- 友愛こどもクラブとことこ
 - ・施設職員と打合せ（11/17）
 - ・施設職員、アーティストと打合せ（12/8）
 - ・ワークショップの実施（2/12 参加者6名、3/8 参加者9名）

【成果】

- 障害児の心理的支援を目的としたワークショップを実施し、いずれの施設でも、ワークショップに参加する子どもたちの障害特性などの実態を職員と事前に共有した上で実施したことで、一人ひとりに寄り



添いながら個々の表現を引き出すことができた。

- 効果としては、初めてのことや初めての人が苦手な子どもも、自分の意思で身体を動かすことや表現することができ、アーティストや他の子どもなど他者と関わる姿が見られるなど、職員が普段とは違う子どもの一面に気付くこともあった。

- 施設職員、教員対象のアンケート満足度：100%

課題と対応

- 障害児入所施設でのワークショップのうち、宮代学園での実施日程やアーティストの調整に時間を要したが、施設職員と打合せを重ね、丁寧にコミュニケーションをとることで実施に向けて前向きに検討していただき、ワークショップを2回実施することができた。

団体にとっての効果

- 放課後等デイサービスでの事業を新たに立ち上げることができた。



所在地：東京都港区南青山2-2-15 WIN青山531 URL：<https://tsubamenokai.org>

保健師および療育保育支援担当者に向けた 偏食少食児への支援対応法の研修

子供が極端に食べずに困っている家庭のための
**偏食・少食
対応セミナー**

東京都民
対象

ハイブリッド開催
(Web/現地)

事前
予約制

参加費
2000円
(1家族)

極端な偏食・少食のお子さんに悩むご家庭で、子供の食への対応方法がわからなくなっているご家庭にむけたセミナーです。事前に悩んでいる内容をお知らせいただき、講師が解説します。また療育センターで成果を出した方法から学び、明日から試せる知識を増やしましょう！

極端な偏食・少食にお困りではありませんか？

- ☐ 偏食・少食が極端で困っている
- ☐ 工夫をしても改善する様子がない
- ☐ 具体的な対応法がわからない
- ☐ 相談しても解決方法がわからなかった
- ☐ 栄養の不足や成長が心配になる
- ☐ 既に栄養不足を指摘されている

日時 2023年 12月3日(日)
10:30～13:30

場所 四谷スポーツスクエア
会議室B (四谷駅徒歩2分)

子連れ参加 子連れOKですが託児はありません。同時に食べる様子を見てもらいアドバイスももらうことができます。詳しくは下記URLをご覧ください

お申込み
お問合せ

WEBフォームにてお申込みください
<https://tsubamenokai.org/seminar/231203first>
【主催】NPO法人つばめの会

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 353,000円
(賃金、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 食育が広がりつつある中で、発達障害児に強度の偏食がある子どもが含まれることは広く知られており、偏食への論理的対応法が求められている。
- 当法人は、医療福祉機関の幅広い職種からの問合せを受け、特定の子どもの偏食対応法についてアドバイスをしてきた。しかしながら、個別の子どもに向けた個別の対応法にとどまり、考え方そのものは伝えられていない。また患者家族からは、医療福祉機関では偏食改善のための対応がなされていないという情報が寄せられている。
- そこで、発達障害児に対応する施設の職員に向けた研修を実施し、強度偏食児への対応法を広める。各施設で対応法が実施されることで、より多くの子どもの偏食状況の将来的な改善につなげる。

【事業内容】

- 発達障害児の偏食に対応する食事についての研修
 - 患者家族に向けた勉強会の実施
 - 勉強会の内容をまとめたニュースレターを医療福祉機関へ配布
 - 専門職向け研修の実施

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 都内患者家族に向けた勉強会の実施
 - 参加人数：15名以上
 - アンケート：満足度および「今後に生かすことができる内容である」との回答70%以上
- ニュースレターの作成と配布
 - 都内病院・療育センター50施設へ配布
- 専門職向け研修の実施
 - 実施時期：令和6年7、9、11月、令和7年1月(全4回1コース)
 - 参加施設数：15施設以上
 - アンケート：満足度および「今後に生かすことができる内容である」との回答70%以上

【事業計画】

- 令和5年10～11月
 - 患者家族向け勉強会申込受付
 - 事前アンケート実施
- 11月
 - 患者家族向け勉強会実施、アンケート実施
- 令和6年1～3月
 - 勉強会の内容をまとめたニュースレター作成、印刷
 - 専門職向け研修案内チラシ、申込サイト作成

○4月

- ニュースレター、専門職向け研修案内の配布

○6月

- 研修参加人数確定、参加者に案内を送付

○7、9、11月、令和7年1月

- 専門職向け研修、アンケート実施（全4回）

○2～3月

- 参加施設に後日アンケートを送付し、実践の程度を確認
- 専門職向け研修の内容をニュースレターにまとめて配布

実施状況・成果

【実施状況】

○患者家族向け勉強会の実施（12/3）

参加：19家族

〔内訳〕 現地参加：10家族18名

配信参加：9家族（配信のため人数は不明）

○アンケートの集計（12月末）

○勉強会の内容をまとめたニュースレターの作成（1～3月）

○事後アンケートの実施（2月）

○専門職向け研修案内チラシの作成（1～3月）

【成果】

○事後アンケートの回答数は12家族であり、配信家族からの回答が少なかったが、参加者の満足度は非常に高かった。

〔満足度〕 非常に満足：41%、満足：59%

〔理解しやすさ〕 非常に分かりやすい：25%、分かりやすい：75%

〔今後試してみたいこと〕 多くあった：67%、少しあった：33%

○参加者の一部に後日聞き取りをした結果「この内容をぜひ知ってほしい」との回答を得た。

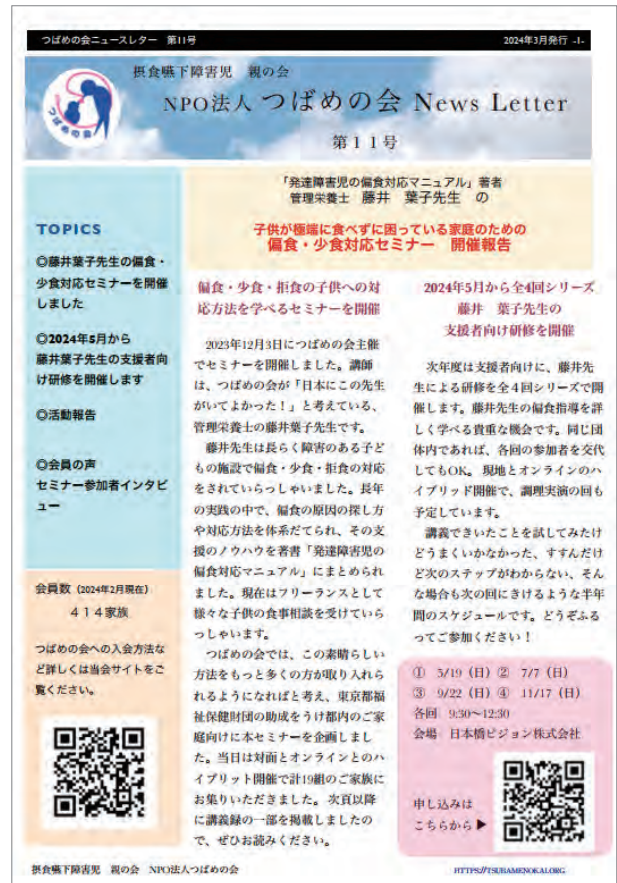
課題と対応

○患者家族向け勉強会の内容が盛りだくさんとなり、講習時間が予定をオーバーしたため、家族ごとに休憩をとっていただく時間配分に変更した。

○配信による参加者向けアンケートの案内が遅れ、アンケートの回収率が下がった。今後は配信時のアナウンスに注意する。

○関西スタッフの家族の体調不良により勉強会当日のスタッフが不足したため、担当を変更して実施した。余裕をもったスタッフ配置にしていたためカバーすることができた。

○よりよい理解のために、可能なら調理講習をした方がよいのではないかと提案が講師からあった。調理



可能な会場が確保できた場合の講習内容や、会場が確保できない場合の講習方法について、講師と一緒に検討していく。

団体にとっての効果

●勉強会では、家庭での食事メニューや食事時間について具体的に知ることで対応できることを実感する方が多く、次年度実施する専門職向け研修に対する患者家族の要望の高さも確認し、専門職向け研修への大きな足掛かりとなった。

●患者家族には勉強会での具体例が参考になり、専門職向けに研修を実施する際にも、専門職が実感をもって自施設の家庭に伝えられる内容であると分かった。

●勉強会参加者の感想を近い専門家に伝えたと、専門職向け研修への期待度が高まったとのコメントをいただいた。

●学会での展示を通して、患者家族向け勉強会を専門家の方に周知できた。



所在地：東京都渋谷区西原2-36-7 URL：https://shibuya-nakayoshi.org/

暮らしに困難さを抱えた子どもたちの居場所活動から地域、人とのつながりをつむぐプロジェクト



実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 242,000円
(賃金、報償費、消耗品費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 発達障害による不登校、不登校の低年齢化、医療的ケア児の学校以外の活動場所が無いなど、既存の制度では社会に居場所が無い子どもがいること、また子ども時代をそのように過ごした子どもは、学校卒業後も安心できる居場所を確保するのが困難になっていることが分かっている。しかしながら、地域において実態を十分に把握できているとは言えず、必要な支援や連携について具体的な指針も示されていない。
- そこで、そのような困難さを抱える子どもとその保護者が直面する困りごとやニーズを把握するための調査、課題解決のためのパイロット事業、効果検証を実施する。

【事業内容】

- 困難さを抱えた子どもと社会のつながりに関するアンケートやインタビューを用いた実態調査
- 困難さを抱える子ども（乳幼児～学齢児）と保護者のための親子サロン
- 困難さを抱える子どものための居場所活動

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 実態調査
調査結果をまとめた報告書を作成し、関係機関で情報共有を行う。またセミナーを実施して地域の課題やニーズを提示し、各関係機関や支援者が必要な支援を検討するきっかけ作りを行う。
●報告書 200部作成、配布
●セミナー開催 支援者・保護者など40名参加
- 親子サロン
子育てについて安心して話したり相談できたりする場を通して保護者がリフレッシュできる機会を提供し、子育てへの関心を失わず自信をつけられるようにする。また、保護者がミニプログラム（親子マッサージやヨガなど）や子育てセミナーを通して子どもとの向き合い方を学ぶ。
●実施数、参加数（親子）、延べ参加数（親子）
・令和5年度：3日、5名（5組）、10名（10組）
・令和6年度：12日、15名（15組）、50名（50組）
- 居場所活動
子どもが安心できる場所を作り、アートや軽運動の活動を通じて自己表現や自信をつける機会を提供する。作成したアートの展示や製品化を通して社会とのつながりを作る。

移動駄菓子屋 「ともだちひろば号」 買い物体験事業



実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 4,057,000円
(備品等購入費、賃金、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 駄菓子屋を営業する中で子どもたちとの会話から、駄菓子屋に行けない子どもたちがいること、その子どもが児童養護施設にいたことが分かった。また、放課後等デイサービスや特別支援学級の子どもの買い物体験を求める声も高まっている。
- そこで、駄菓子を買いたくても買えない子どもたち、買い方が分からない子どもたちを対象に、駄菓子を買う楽しさを提供するとともに、買い物の仕方、駄菓子屋の遊び方、大人になったときの懐かしい思い出の原体験となるような場を提供することを目的に、児童養護施設、放課後等デイサービス事業所へ移動駄菓子屋を継続的に派遣し、買い物体験を支援する。

【事業内容】

- 移動駄菓子屋買い物体験
 - 内容
児童養護施設、放課後等デイサービス事業所への出張駄菓子屋派遣と買い物体験の実施
 - 実施時間帯
15～17時

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 事業効果
移動駄菓子屋がやってくることで、駄菓子屋に行けない子どもたちの毎日の生活の中に生き生きとした場面を作る。駄菓子屋あそびの体験がきっかけとなり、子どもの心の発達や自信につながる。子どもたちが懐かしい思い出の原体験を得ることで、将来大人になったときに自分たちの子育てに生かすことができるようになる。
- 成果目標
 - 移動駄菓子屋の訪問施設数、利用者数（延べ人数）
令和5年度：20件、600名
令和6年度：60件、1,800名
計80件、2,400名
 - 児童養護施設訪問数 20件
 - 放課後等デイサービス訪問数 60件
 - 訪問スタッフ（アルバイト）
児童養護施設卒業生登用20名
(児童養護施設の卒寮を控えた高校生、18才で卒寮した元入所者を訪問スタッフとして登用する)
 - 施設職員へのアンケート実施

【事業計画】

- 令和5年10月
 - プレ移動駄菓子屋訪問実施（2件、60名）
 - 訪問スタッフ（アルバイト）募集
- 令和5年11～12月
 - 備品整備
 - 事業案内チラシ作成、対象施設への送付
 - プレ移動駄菓子屋訪問実施（18件、540名）
- 令和6年1月～令和7年3月
 - 移動駄菓子屋訪問実施（60件、1,800名）

実施状況・成果

【実施状況】

- 移動駄菓子屋の実施（10～3月）
 - 訪問先：児童養護施設2施設、放課後等デイサービス18事業所、その他1施設へ訪問し、移動駄菓子屋体験を実施した。（延べ34件）
※上記のうち大田区内児童養護施設は、感染症対策により訪問が難しいため、駄菓子セットを配達した。（40名×3回）
 - 延べ参加人数：子ども681名、大人149名
 - 利用団体からの質問事項をまとめたQ&Aを作成した。
- 広報、普及
 - 当事業のホームページを開設し、事業告知を掲載した。（11月）
 - チラシを町田市内10か所に配布した。（11月）
 - チラシを都内600か所へ送付した。（12～2月）

【成果】

- 買い物を楽しむことやおつり計算の練習をする体験は狙い通りだったが、当法人が施設訪問する前に子どもがお手伝いをすることで対価としておこづかい（駄菓子屋用金券）を渡す取組をしている施設があり、当日だけではない楽しみ方を工夫している様子が印象的だった。
- レジの使い方を学びたがる子どもがとても多いことも予想外で、手伝う・働くことへの意欲が高まる面でも良い効果があると感じた。
- 児童養護施設卒業者の青年1名、放課後等デイサービス利用者で障害のある高校生をアルバイトとして採用することができた。

課題と対応

- 子どものアレルギーが多岐に渡るため、駄菓子の原材料把握を体系化し、訪問スタッフおよび施設担当者への共有を図っていく。
- 駄菓子代が出せない施設があるため、駄菓子代スポンサーの募集を進めていく。
- 児童養護施設卒業者のスタッフ参加が進みにくいため、施設の担当者や卒業者支援団体との連携を強化していく。



児童養護施設・放課後デイサービス施設ご担当者様へ

東京都内の児童養護施設・放課後デイサービスに出張料無料で訪問します！

移動駄菓子屋 ともだちひろば号 がやってくる！

移動駄菓子屋「ともだちひろば号」買い物体験事業は、公益財団法人東京都福祉保健財団
令和5年度子供が輝く東京・応援事業の定額助成（新たな取組へのチャレンジ）として採択され
ました。移動駄菓子屋を使って「駄菓子屋に行けない子どもたち」に駄菓子を買う楽しみと、
懐かしい思い出の原体験を贈ることを目的に活動します。

特定非営利活動法人町田フレンズサポート

TEL. 042-727-9844

〒194-0045 東京都町田市南成瀬5-12 町田市立総合体育館内
営業時間：10:00～18:00 定休日：月曜日

移動駄菓子屋ともだちひろば号の
出張要請は電話番号またはこちらから！

団体にとっての効果

- 町田市内のロータリークラブや一般企業に駄菓子代を負担いただくなど、取組が認知された。当初想定していなかった子どもショートステイ施設からの要請もあり、訪問施設の拡大を検討した。
- 訪問した施設が自主的にSNSで発信され、地域の子どもまつりの出張要請も増えた。
- 他団体から能登半島地震の現地支援ができないかとの問合せもあり、法人の活動にもつながった。

所在地：東京都中央区新川2-1-11 八重洲第1パークビル7階 URL：https://kidsdoor.net/

在日外国人との異文化交流プロジェクト 「English Drive Well-Being」



体験プログラムの実施風景

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 2,251,000円
(備品等購入費、ホームページ開設費、賃金、報償費、旅費、消耗品費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 当法人が支援する経済的困窮家庭の子どもが多く、自己肯定感を低く感じている傾向が見られた。経済的事情により体験活動や人と交流する機会が不足しているため、自分に自信が持てずに将来の自分への期待も低い。
- そこで、自己肯定感の低さを感じている経済的困窮世帯の中高生を対象に、体験活動を通して英語をツールとして活用する機会や、在日外国人や外国人ボランティアとの交流による成功体験を提供し、今後の学習へのモチベーションにつなげる。
- 事業を通して、子どものチャレンジ精神が旺盛になり行動力が増えること、「自分ならできる」と信じ未経験のことも積極的にやってみること、困難打破できる力、失敗しても立ち直ることができるレジリエンス力の育成などをを目指す。

【事業内容】

- 体験プログラム（全10回開催）
 - 【初期】交流イベント体験
子どもたちと在日外国人、外国人ボランティアが、英語を使って互いの言語を教え合い、それぞれの国の文化について理解を深める。

●【中期】お互いの国や人の理解

英語を使って、互いの国の料理を紹介し、一緒に作り食べることで、その国の文化への理解を深め一体感を得る。

●【後期】社会への参加

英語を使って農業体験やビーチクリーンなどのボランティア活動をする中で、国籍を超えて社会参加できることを体験する。

○プログラム振り返りおよび体験発表会

参加したプログラムを振り返り、子どもたちが自身の学びを英語でアウトプットする機会を持つ。

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 目指すもの、実現したいもの
 - 子どもが前向きに考えられるようになり、自分でチャレンジする主体性、積極性を養う。
 - 英語をツールとして使えることが、将来の夢や目標実現のための選択肢を増やすスキルとなることを実体験として知る。
- 達成したい指標
自己肯定感の向上につながる指標「将来やりたいことがあるか」「大人になることが楽しみか」「周りの人に自分の気持ちを素直に伝えているか」を主要項目とする。

○目標値

上記の問いに対して80%以上の数値を獲得する。
プログラムの効果測定には、専門機関による監修およびアドバイスを導入する。

○プロジェクトの参加者数（延べ人数）

生徒200人、在日外国人150人、合計350人

【事業計画】

○体験プログラム（各回 参加者35人）

●令和5年度

- 10月 交流会開催
- 12月 在日外国人から子どもへ現地文化の紹介
- 1月 子どもから在日外国人へ日本文化の紹介
- 3月 アート施設訪問

●令和6年度

- 5月 高尾山ハイキング
- 6月 ビーチクリーン
- 10月 農業体験
- 12月 英語で寿司体験
- 1月 振り返りワークショップ（参加者35人）
- 3月 発表会（参加者70人）

実施状況・成果

【実施状況】

○体験プログラムの実施

- ボランティア向け説明会兼交流会をオンラインで実施（12/2、ボランティア6名）
- 「国際クッキング交流会パート1」の開催（12/17、中高生9名、ボランティア6名）
- 「国際クッキング交流会パート2」の開催（1/28、中高生6名、ボランティア8名）
- アート施設を訪問（3/17、中高生10名、ボランティア8名）

○体験プログラムの広報、普及、評価

- 当事業のチラシを作成し、当法人が支援する生徒および保護者、ボランティア、支援企業社員に周知した。（11月）
- プログラム参加者にアンケートをとり、そのうち中高生およびボランティアの一部に別途ヒアリングを実施した。
- 当事業専用のホームページを開設して広く告知し、都内在住の中高生とボランティアの参加を募った。（3月）

【成果】

○イベントを通して、子どもたちの英語でコミュニケーションをとる楽しさ、異文化への理解、新しいことに挑戦する意欲などを高められた。

○登録生徒数

32名（高校生17名、中学生15名）

○登録ボランティア数

18名（国籍：アメリカ、オーストラリア、韓国、シンガポール、イギリス、ロシア、ベルギー、日本、ギリシャ、ポーランド）



○効果測定

- 体験プログラム参加前のアンケートで「普段自分の意見を受け入れてもらえていると感じるか」の問いに7名が4または5（5段階回答、5が一番上、以下同じ）と回答したのに対し、参加後のアンケートで「自分の意見を受け入れてもらえたと感じるか」の問いに21名が4または5と回答した。
- 体験プログラム参加前のアンケートで「普段、自分の知らない新しいことを知る機会があるか」の問いに9名が4または5と回答したのに対し、参加後のアンケートで「新しいことを知ることができたか」の問いに15名が4または5と回答した。

課題と対応

- ボランティアの募集が課題のため、引き続き周知活動を続ける。
- 体験プログラム実施時に生徒とボランティアの交流をどのように促すかが課題。法人スタッフが間に入りきっかけを作りやすくしたり、ボランティアに事前に生徒の好きなことなどの情報を共有したりする。

団体にとっての効果

- 子どもの学習面以外の変化や学びに対する前向きな姿勢を見ることができ、新たな発見があった。
- 体験プログラムに参加したボランティアは、ほぼ全員が社会へ貢献したと感じることができた。
- ボランティアが異国で子どもに関わることで、お互いの違いやサポートする意義についての理解が進むなどの波及効果が見られた。



所在地：東京都町田市玉川学園2-3-37 URL：http://www.korokorojidokan.com/tugboat/index.html

防災体験学習「たき火の学校」事業



実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 3,288,000円
(備品等購入費、賃金、消耗品費、
印刷製本費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 首都直下型地震等による東京の被害想定において、当法人所在地である玉川学園地域は、多摩地域で最も厳しい延焼被害が想定されている。地域の防災意識を高めるために町内会では防災訓練を実施しているが、生活様式の変化や高齢化により参加者数の課題を抱えている。今後起こりうる災害に対しては将来を担う子どもへの防災教育の積極的な働きかけが必要である。
- 一方で、法人が管理運営するところ児童館の自主事業として防災学習を行う中で、マッチの使い方やかまどでの火おこしなど火の取り扱いができない子どもが多く、火に対する知識や危険認識の低さが見られた。そこで、学齢期の子どもを対象に防災に対する意識を高め、災害時でも強く生き抜く力をつけるために、火おこしと焚火の活用、消火を学ぶ防災体験学習「たき火の学校」を開講する。

【事業内容】

- たき火の学校
児童館の自炊かまど場を使った焚火の体験講座
1. 様々な条件下での火おこし技術の習得

- 2. 焚火を活用した調理体験
 - 3. 焚火を活用した工作体験
 - 4. 様々な消火方法の学習と技術の習得
- 実施日時：第2第4土曜日、11～13時

- たき火の学校出前教室
上記講座用機材を備えた車両による、都内の子供会、児童施設への出張講座
実施日時：訪問先団体と調整、10～14時

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 事業効果
学齢期の子どもに対して「防災を学ぶ」といった視点ではなく、焚火の楽しみ＝遊びの中で防災に対する意識を身に着けることを目指す。具体的にはマッチの使い方、着火器（ライター）の使い方、様々な素材を使った焚火の方法を習得させるとともに、火の危険性や禁忌事項を学び、消火方法を体験することで身に着ける。
- 成果目標
焚火ができる、消火ができる子どもの育成
たき火の学校参加者：合計2,130名

- 児童館でのたき火の学校（15名/回）
令和5年度：13回 230名
令和6年度：25回 460名
※ころころ児童館でのたき火の学校のうち、もちばなイベント（1回/年）時は令和5年度50名、令和6年度100名の参加者を想定
- たき火の学校出前教室（30名/回）
令和5年度：12回 360名
令和6年度：36回 1,080名

【事業計画】

- 令和5年10月
 - 児童館でのたき火の学校開始（30名）
 - スタッフ募集
- 令和5年11、12月
 - 児童館でのたき火の学校実施（60名）
 - 備品整備
 - 都内児童館、子供会向け案内作成、送付
- 令和6年1月～令和7年3月
 - 児童館でのたき火の学校実施（600名）
 - たき火の学校出張教室開始（1,440名）

実施状況・成果

【実施状況】

- たき火の学校の実施
 - 「ころころ小春祭」にて消火訓練（11/18 約100名）
 - ピザ作りイベント（12/2 14名、3/11 21名、3/14 10名 ※3/11,3/14は幼児対象）
 - 火起こし体験（12/13 7名）
 - 「もちばな作り・たき火パーティー」（1/6 もちばな12名、たき火27名）
 - 水消火器体験（2/7 12名）
 - 「たき火でバームクーヘン」（3/23 17名）
- たき火の学校出前教室の実施
 - 保育園の焼き芋会に講師派遣（10/24 90名）
 - 他団体主催イベントにて「火で曲げて作る竹トンボ作り」出店（11/3 109名）
 - 地域のアウトドアクッキングイベントにて「火起こし体験」（11/11 30名）
 - 多摩市学童保育にて火起こし体験（2/4 24名）
 - 多摩市学童保育にて「火で曲げて作る竹トンボ作り」（2/25 24名）
 - 江東区他団体主催イベントにて火起こし体験（3/17 104名、3/24 118名）
- 広報、PR
 - 法人ホームページや町田市の広報サイトで広く周知するとともに、近隣の学校や施設などへ毎月予定表を配布し、児童館内や掲示板で告知を行った。
 - 玉川学園地域外への波及を目的に、学童保育向けチラシを作成、ダイレクトメールにて配布した。



【成果】

- これまで防災訓練以外の合同イベントがなかった近隣の保育園や地元の消防団と共同でイベントを開催でき、今後の活動の大きな足掛かりとなった。
- 比較的都市部の住宅密集地という地域柄、子どもたちは火を扱う機会が皆無であり、今回のイベントで初めて体験を提供でき、火は便利であると同時に適切な管理が必要であると伝えられた。
- 道ですれ違う子どもや来館した園児から「火の先生！」と声をかけられるようになったことから、参加者とのつながりを感じられた。
- 自動車が手に入ったことで大規模なイベントへ荷物を積んで出張体験へ出向くことができるようになった。
- チラシを各施設やイベント会場で配布したことで、まだ多くはないものの問合せが増えた。

課題と対応

- 町田市外につながりが少ないため、多摩市の学童保育での体験を足掛かりに開催場所を拡大した。
- 事業を展開するにあたり、講師となり得るスタッフの育成が課題。イベントのマニュアル化、スタッフ間での講習や練習の実施、関係スタッフが誰でもイベントを運営できるような仕組み作りを行う。

団体にとっての効果

- 児童館内で完結するイベントの実施に加え、地域の保育園や公園へ出張してのイベント実施に積極的に取り組むことができた。
- 火を楽しむだけでなく、災害への備えや消火など不測の事態へ関連づける火の扱いのニーズがあることが分かり、イベントを実施する上での学びの幅を広げることができた。

すべての子どもが素晴らしい 体験教育を受けられる社会に



宝物ファイルプログラムの実施風景

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 1,254,000円
 (備品等購入費、賃金、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 家族や親戚と触れ合う、食事をする、旅行をする、自然や文化体験をする、友達と遊ぶ、興味のあることを学ぶなどの体験が難しい子どもがいる。社会的環境はそれぞれ複雑化（貧困家庭、ヤングケアラー、ダブルケア、ひとり親、不登校など）し、体験格差は深刻である。体験させたくてもできないのは経済的に厳しい家庭だけではない。ひとり親やダブルケアの場合、保護者が子どもにかかる時間が少なく、体験の機会を与えられない状況を生んでいる。
- そこで、保護者の経済的な理由や家庭環境によって様々な体験をすることができない子どもを含む全ての小学生を対象に、無料で継続的に体験プログラムを実施する。

【事業内容】

- 体験教育プログラム
職業体験、農業体験、文化体験、企業提供によるプログラム体験（CSR事業と連携）
対象：社会的に苦しい環境の小学生
- 体験イベント、プログラム
「ワクワクタウン」（就労、起業、出店、選挙など子

ども自らがよりよい社会にするために考え、行動する「期間限定の仮想都市」づくり）、「宝物ファイルプログラム」

対象：全ての小学生

- プログラムの有効性の調査、研究
全てのプログラムで子どもと保護者を対象に自己肯定感の向上を測るアンケートを実施し、年度ごとにまとめる。

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 事業効果
子どもが体験することにより、自分らしく生き抜く力を身につけ、自己肯定感を高め、将来様々な困難を乗り越え充実した人生を送り、他人と協調して生きていけるようになる。プログラムを通して「探究力」「主体性」「協調性」を身につける。
- 成果目標
 - 体験教育プログラム（企業提供含む）
5回実施、延べ60名参加
 - 体験イベント（ワクワクタウン）
4回実施、延べ800名参加

- 体験プログラム（宝物ファイルプログラム）
3回実施、延べ90名参加
- 認知度向上のための事業活動の広報
 - ・子育て中の保護者への広報
令和5年度：1万名、令和6年度：5万名
 - ・ボランティアの協力
令和5年度：20名、令和6年度：80名
 - ・企業からの協力
取組を知っていただくことで寄付を募る
- アンケート調査によるプログラムの有効性
 - ・子ども：プログラム体験後の自己肯定感向上80%
 - ・保護者：満足度80%

【事業計画】

- 令和5年10月～
 - ホームページ、チラシ制作
 - ボランティアスタッフ登録開始
- 令和5年11月～
 - 各種支援団体打合せ
 - 広報活動（SNS、チラシ配布）
 - 会場予約、各企業打合せ（12月）
 - ホームページ公開（4月）
- 令和6年3月～
 - 宝物ファイルプログラム（3、8、12月）
北区にて実施、各回30名
 - 農業体験（5月）
協力農家にて実施、10～15名程度
 - 子ども会議（5、6、令和7年1、2月）
板橋区と北区にて実施、各回20名程度
 - ワクワクタウン（7、8、令和7年3月×2回）
板橋区と北区にて実施、各回150名
 - 職業体験（8、12月）
協力企業にて複数回実施、各回10名前後

実施状況・成果

【実施状況】

- 認知度向上のための事業活動の広報
 - 子育て中の保護者を対象に、当法人のメルマガ会員16,000名、フェスタ来場者61,000名へ当事業の告知をした。
 - Instagramアカウントを立ち上げ、3,092フォロワーを達成した。
 - ボランティアスタッフへのオンライン説明会を実施し、10名の登録を得た。
 - 取引先企業約50社へ案内を配信した。
 - ホームページ公開に向けて、コンセプト設計や構成などの準備をした。
- 体験プログラム（宝物ファイルプログラム）
 - チラシ作成、印刷（1月）



- 北区社会福祉協議会との打合せ、広報、募集開始、チラシ設置、配布可能な近隣小学校への配布、材料調達（2月）
- 「自己肯定感向上プログラム宝物ファイル」実施（3/16、子ども15名、ボランティア3名）
- 体験イベント（ワクワクタウン）
 - 仮想通貨デザインなど各種資料作成（1、2月）
- 体験教育プログラム
 - 農家視察（2月）

【成果】

- KINDRの日本語版尺度を用いて参加した子どもを対象に事前事後アンケートを実施したところ、実施後に自己肯定感の向上が見られた。特に実施前に自分への評価が低い子どもが実施後に自己肯定感が高く「私には良いところがある」「自分は全くダメだと思えることがある」の2項目で効果が見られた。
- 参加した子どもから「また続きをしたい」との声が多く上がったため、希望する子どもは次回以降も受け入れを検討する。

課題と対応

- ボランティアスタッフを対象に説明会を実施したところ、子どもとの関わり方についての理解はできたが実際に様々な子どもが参加する中で正解の回答ができるのか、声掛けができるのかと不安の声があった。
- 子どもとのかかわり方に関するQ&Aを作成し、事業実施する中でも更新していく。

団体にとっての効果

- 北区と北区教育委員会へ事業内容を説明し、後援手続きに向けて協力いただくことを協議した。後援手続きの準備もできた。

所在地：東京都世田谷区南烏山6-6-5 安藤ビル3階 URL：https://ftcj.org/

子どものウェルビーイング「小学校向け教材開発と授業実施の仕組みづくり」



実施期間

令和5年11月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度： 1,352,000円
(備品等購入費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料)

事業概要・事業内容

【事業概要】

- 自ら命を絶つ小中高生や不登校児は増加傾向にある。当法人の活動を通して、多くの子どもが、生活面や心身にストレスや不安を抱えていることに気付かれ、心身の健康に目を向けるウェルビーイングへの取組が急務であると感じている。そのためには、子どもや周りの大人がウェルビーイングについて知り、考え、セルフケアができるような社会づくりが必要不可欠である。
- ストレスや生きづらさを感じているがどう対処したらよいか分からず悩む子ども、自分や他人を傷つけてしまう子ども、周りの大人が、ウェルビーイングの理解を深めストレスやネガティブなことに対処するための自分らしい術を見つけ、日々の生活で実践できるようになること、更に子どもを取り巻く環境のウェルビーイングが向上することを目的に、次の事業を行う。

【事業内容】

- ①小学生向けウェルビーイング教材開発
- ②子ども向け特設ウェブページ制作
- ③小中学生と周りの大人（保護者、教員、青少年団体職員など）向けセミナー、ワークショップ開催

成果目標・事業計画

【成果目標】

- 事業効果
 - 子ども自身がウェルビーイングへの理解を深め、心身が健やかで自分らしく安心して過ごすための知識やスキルを身につける。
 - 学校や家庭、その他地域での制度や慣習、文化が育まれ、子どもや若者がサポートを受けるための環境が醸成される。
- 成果目標
 - ①小学生向けウェルビーイング教材開発
小学校低学年版と中学年以上版の教材完成（令和7年3月）
 - ②子ども向け特設ウェブページ制作
小学生以上が理解できるウェブページ完成（令和7年3月）
 - ③セミナー、ワークショップ開催
 - ・令和5年11月～令和6年3月
中学校3校、子ども500名、教員30名、保護者60名
 - ・令和6年4月～令和7年3月
中学校6校、子ども1,000名、教員60名、保護者120名

- ④ワークショップに参加した子どもうちの7割が、子どもも社会の大切な一員であること、自分には社会によりよい変化を起こす力があると感じるようになる。

【事業計画】

- 令和5年11月～令和6年3月
 - 子ども向け特設ウェブページ構築準備
 - 中学校以上対象教材の広報とワークショップ開催
- 令和6年4月～9月
 - 小学校中学年以上向け教材開発
 - 中学校や高校でのワークショップ、教員向けセミナー開催
- 令和6年10月～令和7年3月
 - 小学校低学年向け教材開発
 - 子ども向け特設ウェブページ構築
 - 小学校中学年以上対象教材の広報とワークショップ実施

実施状況・成果

【実施状況】

- ウェルビーイング書籍と出前授業の周知
 - 当法人のウェルビーイングページを開設し、中学生以上を対象にしたウェルビーイングに関する電子書籍の公開がスタートしたことを告知し、ブログやSNS、メルマガ、プレスリリースを通じて発信した。(11、12、3月)
 - ラジオ番組への出演、当法人主催イベントを通して当事業を紹介した。(イベント参加者約300名。)毎月配信するメルマガや定期的に発信するSNSでも紹介した。(1～3月)
 - 中学校796校へ出前授業を周知した。
- 中学校での出前授業の開催
 - 世田谷区立中学校(12/4、1年生249名、教員10名)
 - 都内国立中学校(3/7、生徒105名、教員6名)
 - 都内私立中学校(3/14、生徒36名、教員2名)
- 子ども向け特設ウェブページ構築準備

情報収集や発信先との打合せ(構成、デザイン、ターゲットについての話し合い)を行った。

【成果】

- 出前授業を行った中学校の生徒を対象にアンケートをとったところ「自分にとってのウェルビーイングを考えたことがなかったのでこれから向き合っていきたい」「自分や周りに感謝して労わることへの重要性を感じた」などの感想をいただいた。
- 参加した生徒からのフィードバックを教材の改定に反映できた。
- 参加した教員のうち一部の方には、授業で使用了教材を個人のSNSで発信したり、他の教員へ共有したりしていただけた。

課題と対応

- 学校に通っていない子どもに直接アプローチすることが難しい。ウェルビーイングの研究機関やフリースクールなど外部組織と連携しながら、SNSを使った情報発信やフリースクールでの出前授業も検討し、学校に通っていない子どもへ地道にアプローチしていきたい。

団体にとっての効果

- ウェルビーイング書籍を当法人のメルマガやSNSなどで多方面に周知をしたところ、10,000名近くが集うFacebookのウェルビーイングのコミュニティで紹介していただき、50名前後から感想が届くなどした。
- 周知を通してウェルビーイングの研究に取り組む研究者とつながることができ、情報交換や今後の教材開発に関してアドバイスをいただけることとなった。
- プレスリリース後、ウェルビーイング書籍の紹介ページへ3,617アクセスがあった。